

⑥ 秋田ウッド株式会社 〈秋田県大館市〉

## 木くずと廃プラスチックから再生木材製品を展開 大手企業との共同開発が販路拡大の契機に



エコタウン事業の一環として設立された秋田ウッド株式会社社屋

### 廃プラスチックと再生木材から生まれた秋田ウッド

秋田県大館市に本社を構える秋田ウッド（株）は、建設用解体材や木工くずなどの廃木材と、医療・食品メーカー工場等から排出される廃プラスチックを原料にして、木材・プラスチック再生複合材「AO-M ウッド」製品を製造している。「AO-M ウッド」の最大の特徴は、製品を将来的に100%リサイクルする「多回リサイクル」が可能なことである。森林資源や化石燃料などの資源循環の必要性が高まる昨今、多回リサイクル可能なリサイクル素材は益々重要な技術となるだろう。

工場が本格稼働した2004年4月以降、販路拡大に苦戦したが、3年目以降は販路拡大の努力も実り、ようやく生産量が拡大した。主な実績としては、武蔵野大学や慶應義塾大学などの大学や県内病院などがある。

### 販路開拓に大きな壁

同社は、秋田県のエコタウン事業の一環として地元産業を構築することを念頭に2002年12月に設立された。設立に先立ち秋田県では、1999年にエコタウン計画を策定し、地域の特色を持った事業会社像を模索すべく大学や民間企業を巻き込んで勉強会を進

めてきた。その中で、参加した民間企業の一社であるミサワホーム（株）の「M-Wood」が参考になるとし、同社の技術をベースに製品化を進めた。

原料となる廃木材は、県内北部の建築用解体材や木工くずを破砕したものを持ち込んでおり、廃プラスチックは主に県内のメーカーからの調達となっている。いずれも県内を中心に周辺地域からの原料調達を進めているほか、自治体等からの要望に応じて顧客の地で発生した木くずなどを原料としている。

前述したとおり、同社の製品化技術のベースはミサワホーム（株）の技術があったため製品化までは共同で進めることが出来た。しかしながら、リサイクル製品を手がける多くの事業者と同様、「物は作れても販路が確保できない」というところが、同社の最大の課題となる。

建設部材を製造する同社製品の採用判断は設計会社やゼネコンなどが行うことが多い。都内の設計事務所が紹介してくれた武蔵野大学の案件の場合もそうであった。実績がないことを理由に施工

するゼネコンが採用を見送ったのだ。屋外で日光や風雨にさらされるため、部材に要求される耐用年数に満たないという点が技術的な課題として指摘された。

ここで次の案件開拓にシフトする事業者も多いだろう。しかし、同社の場合は、ミサワホーム(株)と共同で、原料の選別と配合を見直すことで耐候性をアップさせ、ゼネコンの技術研究所でその確認試験を行った。その結果、耐用年数は満足する数値が得られ、さらに取付方法や施工にも工夫をこらすことで、武蔵野大学の工事に使われた。この実績が功を制し、他のゼネコンなどからも声が掛かるようになり、慶應義塾大学信濃キャンパスや経団連ビルにも導入されるに至った。また最近は、香港、中東ドバイ向けの部材としても使われ始めている。

## 成功のポイントとこれから

同社の成功ポイントは、ミサワホームとの共同研究による製品力の向上と実績の確保である。ユーザーであるゼネコンの耐用年数に対するニーズや実績の少ないことによる信用を、共同研究という形でうまく克服することに成功した。今後は、自社ブランドの構築と倉庫等配送機能の整備により、利益率の向上を図ることと、海外への販路を開拓することの2つが大きなステージである。



厚生病院の広場のベンチに使われている AO-M ウッド



AO-M ウッドは屋外のデッキなどで落ち着いた雰囲気を発揮する

### <環境ビジネスのすすめ ~三浦清久代表取締役社長からの一言~>

先行き不透明感の今日、自ら需要を創出し市場の拡大を図る一方、環境ビジネスを支えているのは私どもという自負をもって自社を経営していきたいと考えております。

#### <企業データ>

秋田ウッド株式会社  
所在地：秋田県大館市白沢字松原 570 番地  
設立：2002年、資本金：8,500万円  
電話番号：0186-47-2230  
<http://www.akitawood.e-const.jp/index.html>

